

〔孝義錄二〕伊賀潔白者彌兵衛 植村の百姓なり
桶

彌兵衛○中三七といふもの、宅地をかひそへ、畠になさんと思ひて、藪を打おこしけるに、一ツの
徳利の鍬○中あたりて破れしが、内より金の出ければ略○中
彌兵衛、長にむかひて、地をば求めしか
ど、金の土中より出んことは、思ひもかけず、いかにもして、もとのぬしに返し給はるべしとて、見
返もせず。

〔こがねぐさ〕ちかきころになんありける、みやこ五條わたりに、さまよひけるかたゐなるもの、
橋のほとりにて、きぬもてつ、みなせるものをひろひけるが、いとおもかりければ、あやしとお
もひなして、あけて見けるに、こがね三百ひらに、かいつけやうの物もそべてありけるにぞ、やが
てこがねのぬしもこをおくりやる人の名○中もあからにぞしられける。略○中
かのがり行き略○中
しなへる人のあやまちをなだめて、のちのいましめをこそたゞし給へ、やつがれがほいに侍る
なりとて、みほひらのこがねかいつけつ、みなせるきぬともにかへしあたへけるこそ、いとめ
でたきこ、ろざしなりけれあるじもあまりの事に、た、へつべき言ばもなくて、なみだおしぬ
ぐひつ○中こがねにまれ、ろ金にまれ、ひろひし人のおほやけにうたへ出づるときは、その
なかばをわかちて、下したまはる事の御おきてなり、さらば此こがね百あまり五十ひらは、そこ
にまゐらせん○中そこのきよきこ、ろざしをた、へまうす志るしなりとて、あたへければ、か
たる人、かしらうちふりて○中さらにことうけもせず、あるじも其こ、ろをとみにくみて、やつ
がれこがねもてゐやとするにはあらず、それのこころざしをうけひ侍るうへ、わがこ、ろをも
うけひたまへと、せちにきこゆれば、かたゐのまをしけるは、さらばやつがれのぞむ事あり、わが
ごとく河原にさまよひなすもの、百人にもあまりぬらん、これらに一たび、あくまでいひたうべ
させ、酒のませてんとほりするなり、あすさりての日、こはいひむして、酒いつたるをそへて、五條